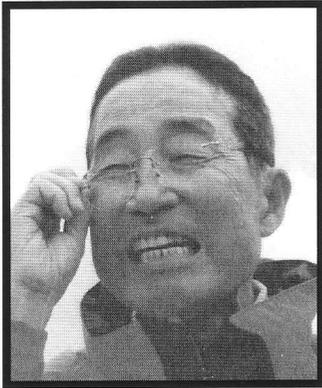


## さらば友よ！

昭和38年卒 瀬 川 潔



田原 嘉曙(旧名 耕造)  
平成23年11月2日没  
遺族 妻佳世子様

田原君の訃報は奥様からの電話で知った。三年位前から持病のため、入退院を繰り返し、ついに力尽きて永眠したとの事であった。

彼が亡くなる二週間程前に、航空部創部75周年記念事業に参加し、その夜に入院先の京都山科の音羽記念病院へ見舞いに行き、久しぶりの再会となったが、病状悪化のため、初めは会話がなかなか噛み合わずに苦勞した。話をする内に段々と理解出来るようになり、創部75周年記念行事の報告をし、私がもらってきた記念品を喜んで彼が受け取ってくれた。彼も参加したかったが病院からドクターストップがかけられ、行けなかったとのこと。夜間の治療があるとのことで、あまり長くは話しを出来なかったが、帰り際、何時も強気の彼が涙を流した。再会の喜びの涙か、別れの涙か、面会時間の関係上、そう長くは居られなかったが、彼の姿、態度を見て、あまり永くは無いなと感じて、非常に悲しい思いにかられた。あの涙は永久の別

れの涙だったのだと、今思い当たる。

彼との出会いは1959年春、同志社に入学し、新町の航空部部室で初めて会った時だった。非常に声の大きな好青年で、直ぐに仲良くなった。玉水でのプライマリー合宿を共に体験した。しかし、1年生の終わりか2年生の初めに彼の父上が亡くなり、彼の肩に田原家長男としての荷がかかり、航空部を辞める、辞めないという事態が発生したが、同期の皆で、合宿には参加しなくてもよいら部を辞めるなど説得し、部員として残ったという経緯があった。しかし、その後は先輩として後輩の指導を非常に良くし、1年後輩の本誌編集長窪田昌三君曰く、田原先輩にはよく可愛がって頂いたとのことである。

私は、長野県白馬村でペンションを営んでいる故、彼の告別式に参列することが出来ず、翔友会会長政 志郎先輩と窪田昌三君、玉井利宏君に参列して頂き、誠に感謝している。

38年卒の同期仲間の内、原 啓介、河口精二、そして田原耕造君と三人も居なくなり非常に寂しい限りである。

彼の長い療養生活を支えて来られた奥様も大変だったと思います。本当にご苦勞様でした。

ご冥福をお祈り申し上げると共に、ご家族ご親族の方々のご多幸を祈念します。

彼も天国で安らかに眠れることであろう。空の上から残る我々を見守っていてくれ。